

## 1988 年度学会賞受賞作品・授賞理由

---

### ◆石川賞「ミクロの都市計画と土地利用」に関する一連の研究および活動

日端 康雄(筑波大学社会工学系助教授)

〈選考理由〉

本研究および活動は、「地区単位とした土地利用の計画的制御に関する研究」を基軸とし、その後 10 余年にわたり、地区レベルの計画、計画制御、プランニングコントロールというテーマを掲げて、理論と実践化を試みてきたものである。その結果、著者はこれらの成果を「ミクロの都市計画と土地利用」と題して取りまとめた。

本書を通じて著者の一貫した関心は都市計画による計画的土地利用の問題を、プランニングとコントロールを結合することによって説いて行こうというものである。その研究範囲は、諸外国の関連諸制度の検討、膨大な実態調査や意向調査を踏まえた実証的な都市計画システムの適用シミュレーションやその効果の追跡など、広範多岐にわたる調査研究を進め、地区詳細計画の実施にともなった計画の可能性を展望している。

また、これらの一連の研究の成果を、わが国の地区計画制度の創設に当たり、著者は関連審議会に参加し、その推移に努めてきた。さらにその後も、わが国の地区レベルの計画の運営と展開に大きな役割を果たしている。

以上、著作に見られる一巡の研究と地区計画制度の推進などは、理論と実践を結び付ける都市計画制度の展開に貴重な足跡を残しているものであり、石川賞にふさわしいものと判断した。

### ◆石川賞比較都市計画史研究における国際的活動—特に、東京国際シンポジウム 1988 および第3回都市計画史国際会議における貢献と報告—

ゴードン・E・チェリー(英国バーミンガム大学教授)

## 《選考理由》

チェリー教授は、元英国都市計画学会会長であり、現在、国際都市計画史学会(Planning History Group)会長を勤める都市計画史の国際権威である。

日本都市計画学会は、昨年11月、東京で開催された、日本近代都市計画法制百年を記念する「東京国際シンポジウム1988」および「第3回都市計画史国際会議」について、初めてこの種の国際会議の主催団体となり、実質的に会議の内容に責任を負うこととなったが、チェリー教授はこの企画の当初から終始熱心に内容・形式の両面にわたり、適切な助言に当たられた。

この2つの国際会議は、わが国の都市計画の歩みを国際的な視野で顧みるとともに、わが国都市計画に対して海外からの関心を高め、今後の国際交流のための基礎を築いたものとして、高い国際的評価を受けた。またこれらを通じて、本学会が海外の都市計画関係者と交流を持ち、今後さらに発展させていく途が聞かれたが、これらの点で、チェリー教授の果たした功績は大きい。

さらに、みずから両会議で、それぞれ「大都市の計画：過去における未来」と題する基調講演と「欧米都市の非集中化」と題する論文報告を行った。両論文は従来からの欧米における都市計画発達の比較的分析を基礎としつつも、日本都市計画史についての考察を加えて「比較都市計画史」的考察を発展させ、さらに東欧諸国・開発進上国にも視野を拡げた意欲的なものである。各国の都市計画史の共通性と独自性の時代的変遷を追求し、都市計画の世界史の概念を示唆している。両論文は、本学会が両会議を開催した意図にも合致し、会議中の議論を深める上で大きな役割を果たすとともに、さらに今後の都市計画の国際交流の中で深められるべき課題を提起したものとして、高く評価される。

以上により、チェリー教授は、わが国都市計画の国際的スケールでの研究発展の上で、顕著な独創的かつ啓蒙的な貢献をしたものと認め、特に外国人として最初の石川賞を授与するにふさわしいものと判断した。

## ◆論文賞都市基盤施設整備からみた都心機能の競合と成長に関する一連の研究

**依田 和夫**(住宅・都市整備公団理事)

《選考理由》

本研究は地域中心としての都心地区を取り上げ、都心地区に関する交通施設を中心とした基盤施設整備と都心機能の集積核である都心地区との相互の競合および成長との関連を実態分析し、基盤施設整備がそれに果たす役割と基盤施設の整備方策を明らかにしようとしたものである。

本研究において、著者は幾つかの都心地区の商圈が相互に重なり、競合関係にある場において生じている現象を実証的に観察し、基盤施設整備と都心地区との競合および成長との関連を内部整備と外部整備という概念を用いて分析した結果、両整備がそれぞれ都心地区の競合および成長に大きな関連を持ち、適切なタイミングで実施されるか否かで、大きな違いが生じることを明示した。特に競合に関しては、商圈の動向を直接左右する幹線道路、鉄道などの外部整備が大きく関わり、成長に関しては、土地区画整理事業による内部整備が大きく関わっていることを明らかにしている。

著者は本研究に関し、従来から数論文を日本都市計画学会学術研究論文集などにおいて発表しており、これの一連の研究を通して、従来から効果的把握が困難とされた都心機能に対する都市基盤施設整備の及ぼす影響を実態分析に基づいて多角的に考察し得たことは都市計画の科学化の上で高く評価できる。依って、著者の一連の研究を論文賞としてふさわしいものと判断した。

#### ◆計画設計賞複合都市の先駆け「厚木ニューシティ森の里」

**吉田 義明**(住宅・都市整備公団 代表 開発本部長)

**鶴見 隆**(住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部 代表 厚木事務所長)

《選考理由》

「厚木ニューシティ森の里」は、神奈川県の特種市構想に基づく総開発面積285haに及ぶ大規模都市開発事業である。その構成はわが国における従来の郊外型の都市開発と異なり、地域の発展に大きく貢献し得る職・住を併せ持つニュータウン

ンとなっている。現在では概成の段階に至っているが、計画の思想と町づくりの技術面における総意工夫は次の点において高く評価し得るものである。

第1点は、自然との調和である。すなわち、総開発面積の42%(約120ha)を占める公園・緑地を確保し、市民のレクリエーション拠点と緑のネットワークを形成せしめることに成功している。

第2点は、質の高い学園・研究施設の誘致を実現し、その配置と構成において、周辺環境との調和が図られている。

第3点は、多目的調整池の活用である。すなわち、都市計画緑地と調整池との複合利用により、親水空間を見事に演出している。

第4点は、自動車時代の都市形態の工夫である。街区形成における自動車交通の分離手法、特に都市内を南北と東西に伸びる2系統の歩行者専用道路(「四季の路」と「春の路」)は自動車交通から守られた空間となり、市民のふれあいの場にまで機能を高めている。

第5点は、統一あるいは町並み形成と地区計画の実践である。住民ゾーンにおいては統一ある町並み形成を計画的に推進するために、「町づくり申し合わせ(任意協定)」を締結し、施設・学園ゾーンにおいては、企業・大学などと「緑化協定」を結ぶなど、地域計画の網をかぶせ、町づくりの質を高めることに成功している。

以上の点において、「森の里」新都市建設は、わが国における今後の大都市周辺のニュータウン計画のモデルになるものであり、その業績を高く評価し、計画設計賞にふさわしいと判断した。

#### ◆論文奨励賞都市公園の配置に関する計画学的研究

養茂 寿太郎(東京農業大学農学部助教授)

〈選考理由〉

本論文は著者の学位論文であり、当該テーマに関する一達の研究のまとめである。

都市公園の配置に関しては、明治時代以来、多くの理論が諸外国から紹介され、それを受けて研究調査が進められてきた。本研究はその公園配置研究の経緯と問題点の整理から出発し、実際の公園配置計画の特徴を明治期の立地本位型配置、大正期の分配型配置、昭和初期の構造型配置と位置付けている。次いで公園配置の基本型を分散型、触手型、ネットワーク型とし、これらを遷移段階としてとらえている。

本論文の特徴は、分散型、ネットワーク型およびその中間型としての触手型の存在とそれらの各型と公園面積率との関係を明らかにしたこと、特に公園面積率の低い段階での触手型公園配置計画の重要性を指摘したこと、またこれらの論証のため、多くの既存都市やニュータウンを事例対象として、実証的に研究を行っていることが挙げられる。

公園配置論研究としては、従来比較的研究が少なかった部分を補強する意味もあり、今後の公園配置計画研究への多くの示唆と一層の刺激を与えたものと考え、論文奨励賞にふさわしいものと判断した。

#### ◆論文奨励賞「地区交通計画」に関する一連の研究

久保田 尚(埼玉大学工学部助手)

〈選考理由〉

本研究は著者の学位論文「住宅団地における地区交通改善の方法に関する研究」を始めとする「地区交通計画」に関する一連の研究であって、地区交通計画に関連する国内外の調査研究のレビューをまとめた数編の解説的論文とわが国の住宅団地で試みた地区交通改善に関する実験的研究に関連する数編の論文の2つのグループに分けられる。

前者については、ヨーロッパ諸国とわが国を中心に歩車共存道路、ボンエルフなどの新しい道路交通管理コンセプトや手法などの実態を把握し、地区交通計画について、詳細で有用なレビューを行っている。後者については、わが国の住宅団地内における駐車問題改善のために、具体的な走行実験に基づく研究成果を、実際の住宅団地に導入して試行実験を行い、それが住民に受け入れられるまでのプロセスを通して

実践的な地区交通計画の計画・設計・評価手法と計画プロセスについての知見を取りまとめたものである。

本研究の意義は単に歩車共存手法の有効性を実証的に明らかにしたことに留まらず、地区交通という住民にとって身近な交通問題に対して、新たに「実験」という社会参加プロセスを取り入れることが合意形成の有力な手段となることを示したもので、今後の研究のあり方に一つの有用な実際的方法を提案した意義は大きい。

このように、地区交通計画の実践を通して、新しい計画のあり方とその実際的な方法を提示している点で、大きく貢献しており、今後の発展性が期待できることから、論文奨励賞にふさわしいものであると判断した。

#### ◆論文奨励賞住宅地区の交通抑制計画に関する方法論的研究

山中 英夫(京都大学工学部助手)

〈選考理由〉

本論文は、住宅地区における交通抑制手法について諸外国の事例を含めてレビューし、かつ住宅地区における交通抑制の概念と計画プロセスを整理した部分と、これを実際に地区交通計画として実施する場合に必要な交通流予測手法、交通環境評価モデルおよびその計算機支援システムなどの開発の部分の2つよりなっている。

論文のオリジナルな部分であるモデル開発については、地区交通需要予測、交通目的ごとの交通手段選択モデルおよび利用径路予測のための交通配分手法を検討した部分と、地区交通環境を安全性、住民意識を利用した安全感、車利用の利便感の3つの側面から評価する環境モデルを検討した部分からなり、さらにコンピュータを利用して、これらの膨大な作業を実施するための支援ツステムの開発が試みられている。

交通需要予測モデル、交通環境評価モデルはどちらも地区交通計画の重要な部分であり、研究の遅れていた部分であるが、優れたアイデアで1つの実際的なアプローチを切り拓いていることは高く評価できる。これらの理論を一般性を持つ基礎的な手法とするためには今後の検証と改良が必要と考えられるが、本論文は地区交通計

画理論の発展に貢献し、将来の発展性が期待できることから、論文奨励賞にふさわしいものであると判断した。